

【編集後記】

『記念報』も 28 号を数えることとなった。

編集後記を執筆している今、巨大化した中国が震源地となって、「一带一路」経由で疫病が世界に蔓延している。中国との関係の深いところほど、大量の罹患者を出している。歴史を振り返れば、中世ヨーロッパを恐怖のどん底に落とし込んだ「黒死病」すなわちペストも、ユーラシア大陸を一体化したモンゴル帝国が勢力拡大に利用した交易ルートに乗って蔓延した。中国が歴史的にその一部と主張する雲南が発生源とされている。いずれも、中国とそこに関わる世界が膨脹拡大した時、それに巻き込まれた地域に悲惨な状況が出現している。人と物の動く速度が 13 世紀とは比べものにならないほど速くなった 21 世紀の現在、当然蔓延の速度は比べものにならない。そして、きしみ始めている「国民国家」の枠を突き破ろうとしていたヨーロッパもその害毒におかされ、後退を呼び掛ける内向きナショナリズムが力を持ちつつある。これほどまでに世界における中国の影響力が再び大きくなるとは、100 年前に中国各地を、アジア各地を「卒業大旅行」で回っていた書院生には想像できなかつたのではないだろうか。いまや、好き嫌いにに関わりなく、中国の影響力を受けていないところはない。

2016 年、中国国家図書館出版社から『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』全 200 巻が刊行された。これは、日本では国会図書館にあたる中国国家図書館に蔵されていた書院生の大旅行報告書・日誌などに、すでに日本ではオンデマンド版などで出版されている同文書院以来引き継がれてきた愛蔵資料（と同一のもの）を合わせて一つにしたものである。ページをめくると影印版、すなわち原文を写真製版してそのまま出版したものであることがわかる。満鉄関係の資料などが多く中文訳された状態で出版されていることを考えると、中国側では手稿資料、つまり手書きの資料の解読、翻訳は不可能と判断したと考えられる。研究資料としての価値は一次資料、すなわち原典が最善であることは言うまでもない。中国出版の影印復刻版は、その意味で結果的にかなり一次資料に近い状態であったと言ってよい。従って、資料的価値は翻訳されたものよりもはるかに高い。そこには、当時の書院生の息遣いが、彼らの肉筆と共に蘇ってくる。そこで表現されるものは学生の特性として、時に生硬であり、時に表面的であることは免れがたい。専門の調査マンではないがゆえの視角がしばしば垣間見られる。しかし、それがかえってプロとは異なる指摘となる事もある。もっとも、その一方で気になることであるが、20 世紀前半の東亜同文書院生にとって、中国は「援助」あるいは「訓導」の対象であったのか？それとも共に手を組み、西欧世界と対峙する同志であったのか？いずれにせよ、当時の書院生からすれば、中国は等身大の世界であった。少なくとも日常的に上海で接していた中国人社会をそう見ていた。だからこそ、遠慮のないまなざしを持って直に中国の民に接しようとしたことは、伝わってくる。

さて、書院生の報告書など同文書院関連書類は、大戦末期になると戦局の悪化に伴う日本までの海路の不安などから、日本に届けられることはなかった。戦後、同文書院の教員学生が引き揚げる際に、中国側の接收物として現地に残さざるを得なかった資料である。国家図書館での刊行物は、それが巡り巡って中国共産党の手に入り、長期間死蔵されていたものが日の目を見たわけである。国家図書館の前身である北京図書館にいかなる状態で「所蔵」「保管」されていたのか、他所に保管されていたものはなかったのか、中国にあるものだけでコンプリートになるのかなど、色々考えさせられる部分がある。当センターの協力なしにこうした出版物が刊行されたことは、ひとつの驚異である。なお、書院生の踏査可能地域も日中戦争の展開に伴って縮小せざるを得なくなり、基本的に日本軍統治下に限定されることとなった。今後の書院研究の方向性として、考慮すべき事柄ではないだろうか。

彙報をご覧いただければ、今年度のセンターの活動がお分かりいただける。大規模なものだけでも6月の霞山会“Think Asia”のシンポジウム「日中関係の未来図—歴史から考える—」、10月の高松での展示会・講演会、11月には「愛知大学史シリーズ」としての講演会、さらに同時期に卒業生である平松礼二画伯の特別展覧会があった。それらの中からも、上記の100年前の書院生の目にした中国と現在の中国との比較、現在を考えようとする意識を読み取っていただければ幸いである。そして研究活動としては、上記の中国での『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』全200巻の刊行によって可能となった書院生の調査報告書の再読を目的としたプロジェクトも始まっている。本号の三好・長谷川の論考は、その初歩的な成果である。

2019年度は愛知大学創立74年目にあたり、短期大学部創立60周年であった。愛知大学史への視角は、本記念センターにとってゆるがせにできないものであることは言うまでもない。本号に収められた文章の中から、本記念センターの任務である東亜同文書院に関する検証と顕彰だけでなく、愛知大学史についての同様の作業を行おうとしていることを示したつもりである。今後も、そうした方向を維持していきたい。

2020年3月31日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章